

平成21年6月18日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19401047
研究課題名（和文） マオイスト運動の台頭と地域社会への影響—政体変革期ネパールにおける人類学的研究
研究課題名（英文） An Anthropological Study of the Rise of the Maoist Movement and Its Influence over Local Communities in Nepal: Facing the Period of Polity Change
研究代表者 南 真木人（MINAMI MAKITO） 国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授 研究者番号：40239314

研究成果の概要：2008年、マオイストことネパール共産党（毛派）が政権を担い、王制から共和制に変革したネパールにおいて、人民戦争をはじめとするマオイスト運動が地域社会や民族/カースト諸団体に与えた影響を現地調査に基づいて研究した。マオイストが主張する共和制、世俗国家、包摂・参加の政治、連邦制の実現という新生ネパールの構想が、大勢では変化と平和を求める人びとから支持されたが、事例研究からその実態は一樣ではないことが明らかになった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2008年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
年度			
総計	9,000,000	2,700,000	11,700,000

研究分野：人類学・南アジア研究

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、マオイスト、人民戦争、共和制、王制、社会運動、選挙、ネパール

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1996年に始まったマオイストの共和制を求める武装闘争（人民戦争）は、2006年の停戦までに約1万3千人の死者と数万人といわれる国内避難民を生み、多くのインフラが破壊された。科研申請時の2006年11月においては、政治の表舞台に復帰したマオイスト首脳が、武装解除とマオイスト人民解放軍及びネパール国軍の武器管理の条件や2007年6月に予定されていた制憲議会選挙（2008年4月に実現）について交渉を重ねていた。

(2) マオイスト運動については従来ジャーナリストや政治学者が、活動、戦闘、被害状況などを報告し、その背景としてマオイスト首脳、政治家、国王の発言やイデオロギーを分析してきた。だが、「普通の」人びとがマオイスト運動をどのように受けとめ、地域の政治、社会、文化、規範、経済にどのような影響を与えているのかは、ほとんど研究されていなかった。

(3) こうした情勢と研究状況を受け本研究は、人民戦争をはじめとするマオイスト運

動が地域社会や民族/カースト諸団体などのコミュニティにどのような影響を与えているのかを調査し、もってネパールの人びとにとってマオイスト運動とは何か、どのような意味をもつのかを解明しようと構想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、マオイストが台頭するネパールの政治情勢を前にして、ネパールの社会政治的な変動とその背景を地域社会やコミュニティのレベルから調査研究し、ネパールで今何が起きているのかを解明することである。具体的には、マオイスト台頭の虚実（イメージと実像）を地域社会やコミュニティに与えたマオイスト運動の影響から分析し、ネパールの人びとにとって、マオイスト運動あるいはそのイデオロギーとはどのような意味をもつのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、マオイスト運動が政体を変革するほどに勢力をもつに至った背景を、できるだけ多くの地域社会やコミュニティの事例から多面的に分析し、総合的に分析することを目指した。そのため研究体制を組織するにあたり、マオイストの基盤地域、実効支配地域、人民政府が樹立されていない地域など調査対象とする地域の多様性、エスニシティ（カースト、ダリット〔不可触カースト〕やジェンダーなどの属性を含む）、調査の関心・テーマの多様性に配慮した。さらに問題発生以前の状況と比較するため、班員は人民戦争発生以前から地域社会やコミュニティの政治特性、人間関係と力学、文化的背景、エスニシティなどを調査、観察してきた人類学者を中心に組織した。

(2) 調査の具体的な方法は、班員それぞれが対象地域ないしコミュニティに赴いて、人類学のフィールドワークに基づく聞き取り調査と参与観察を行うものである。あわせて各政党の綱領、制憲議会選挙に向けたマニフェスト、ビラなどの文書や文献を収集した。

## 4. 研究成果

(1) マオイスト運動の台頭： マオイスト運動の台頭をはかる目安として制憲議会選挙の過程と結果を重視し、各政党の選挙前の選挙公約、街頭運動と人びとの反応、投票行動、開票結果などを調査した。選挙ではマオイストが220議席を獲得して第一党になり、ネパール会議派（110議席）、統一共産党（103議席）がそれに続いた。マオイストは小選挙区で圧勝し（240議席中120議席）、比例代表では約3割の人びと（335議席中100議席）

の支持を得た。マオイスト躍進の背景として、マオイストに見られた、巧みな選挙キャンペーン、マイノリティ包摂・参加への積極的な取り組み（彼らが主張した候補者の留保制が実現）、新生ネパールというイメージやそれを渴望する時勢とマオイストの主張との合致などが考えられた。他方、マオイストが選挙に負けると、人民戦争を再開するのではないかという不安や強迫観もマオイスト勝因の一つと推測された。何れにしても、平和と変化を求める人びとの多様な思惑がマオイストへの投票を誘発したが、後述する班員個別の成果にあるように、本研究ではその多様な思惑（立場、利害）を調査し、大文字の、ないし一枚岩の「マオイスト運動」では捉えきれない実態を明らかにすることができた。

(2) 地域社会及びコミュニティへの影響： マオイスト運動が地域社会及びコミュニティに与えた影響として、王制廃止と共和制、世俗国家化（政教分離）、包摂と参加（留保制度の導入など）、連邦制（民族自治）、近代化（権利意識、リテラシー）、グローバル化（国際労働移動と送金経済）、アイデンティティの政治・対決の政治（社会運動）、戦後処理（補償や帰還）、女性の社会参加という論点から、特定の地域社会、マイノリティ（先住民、ダリット、女性）、国内避難民、移民、人民戦争犠牲者遺族・寡婦、マオイスト党员、人民解放軍の兵士を対象として調査した。時間軸では、人民戦争（1996～2006年）の経験・記憶と、停戦に至ってから現在までの動向を対象とした。以下のことが明らかになった。まず、王制廃止と共和制への移行は、マオイスト運動なくしては起こり得なかった革命的な出来事であることが確認できた。このヒンドゥー王国でなくなった事実が、世俗国家化、従来のカースト・ヒエラルキーに基づく社会の不正を是正する包摂・参加の諸制度、連邦制を要請した。これに伴い、先住民やダリット、女性、マデシ（タライ地域出身者）の人びとは、包摂・参加のための諸制度に確固とした位置を占めようと権利要求の運動や闘争を急進化させ、しばしば暴力を伴う形態に発展するようになった。運動の暴力化は、マオイスト運動の武力革命路線を手本としており、その負の遺産である。

他方、マオイスト運動の間接的な影響として、それが近代化とグローバル化を牽引した側面を指摘できる。ここでいう近代化とは、マイノリティの権利意識の拡大や社会運動の激化に典型的に現れる変化であり、グローバル化とは人民戦争期多くの青年男子が、国内の危険を避け、従来あったインド以外の海外（湾岸諸国やマレーシアなど）へ出稼ぎに行くようになった現象である。共産主義革命としての人民戦争は、皮肉にもグローバルな資本主義を村々に浸透させたのである。これ

らは、もちろん世界規模で普遍化する民主主義、人権、自由、平等、公正といった理念やネパールにおいても確実に進展してきた「開発」の影響とも考えられる。だが、マオイスト運動が引き金になったり、加速・定着させたりしたインパクトは看過できない。

(3) 班員個別の調査概要と成果：

① 南は、ナワルパラシ郡ボジャ村周辺において、人民戦争期にマガールの人びとがマオイストとのあいだでどのような経験をし、どのような印象が形成されたかを調査し、制憲議会選挙の投票も同地域で観察した。他方、カトマンズにおいてマガール協会とマオイストが唱道する民族自治の異同、停戦後のマガール協会内部の権力構造の変化を調べた。村人は頻繁に人民解放軍に食事を提供してきたが、彼/彼女らが希少な米飯や肉ではなく、村人の日常食であるトウモロコシ飯を要求し、厳格に禁酒を守ることに好感を抱いてきた。貧困層や弱者の味方というマオイストのイメージ戦略は奏功していた。ただし、村から人民解放軍に入隊した青年は皆無で、むしろ海外へ出稼ぎに行く青年が急増した。人民解放軍に志願するには、マオイストの主張を理解できる、一定以上の教育レベルが必要であることが明らかになった。マオイストが「伝統」的な村の世界にもたらしたものは、権利、公正、正義の意識とそれを勝ち取るための論理的な話法・言説、書く身体といった広義のリテラシー、すなわち「近代」そのものだった。

② 安野は、西ネパールのジウムラ郡において現地調査を行い、あるブラーマン村落へのマオイスト人民戦争の影響を考察した。まず、当該の村から出奔してマオイストになり、後に政府に投降した4人の娘とその家族から経緯を聞いた。また、マオイストによるリクルート・キャンペーンが引き起こした集団避難について、ブドゥ村はスルケットへ、カダ村は郡庁所在地へ逃げ出し、後に人権擁護NGOや赤十字の協力で帰還したことを聞き出した。さらに、村に作られた人民政府の初代首長となった若者への反撥から、銃を持つマオイストに村人が一斉に投石するという事件が起こり、それが一連の報復をもたらしたことを知った。このような反マオイスト運動は、人民戦争下、他の地域でも起こっていた。制憲議会選挙においてジウムラ小選挙区ではマオイストが勝利したが、その主な理由が、人民戦争がもたらした「恐怖」であることを明らかにした。

③ マハラジャンは、カトマンズ盆地におけるマオイスト運動の影響について調査研究した。その際、制憲議会選挙における人びとの考え方と行動に着目した。とりわけ、マオイストの党首プラチャンダが立候補したカトマンズ10選挙区について詳細に調査し

た。選挙においてマオイストは周到な準備を行い、自らが持っている資源—党員、支持者、予算（党の資金、寄付金、政府からの選挙配分金など）、人的ネットワークを有効に活用し、政治集会、街頭演説、ミニ集会、地域の巡行などを効果的に実施していたことが判明した。それに対して他の政党は、内部における意見不統一、立場の過信などのため選挙への準備が遅れたり、効果的対策がなされなかったりと概ね準備不足であった。これらのことが、マオイストのカトマンズ盆地における善戦、全国レベルでの勝利と第一党への躍進に大きく影響していることが明らかになった。

④ 藤倉は、カトマンズ周辺と西ネパール平野部でタルー人の元債務農業労働者（カマイヤ）やダリットをはじめとする貧困層による社会運動や日常的な生活向上の試みについて調査した。制憲議会選挙を前にして、貧困層や農村部中間層でマオイストに対する期待が大きく高まっていたことを確認した。それと同時に、カマイヤを含むタルー人やダリット組織による権利要求のための「対決型の政治」(contentious politics) 活動が活発化していることを確認した。これには新憲法制定を前に自集団の存在と要求をネパール政治の表舞台で可視化するためのさまざまな戦術（デモ、ストライキ、道路封鎖、メディアの動員など）が含まれていた。さらにそのほとんどがタルー人である元カマイヤの場合では、土地の分配や就業・教育についての優遇措置を求めるいわば階級的な要求とともに、タルー人の自治という「民族的」な要求が絡み合ってきている。これは新憲法下で「連邦制」がとられることを暫定政権の主要政党が約束したことと関連している。さまざまな立場のタルーのリーダーが議論する場面で参与観察を行い、これまでの歴史的・社会的差別や暴力と非暴力の社会変化に関するタルー内での多様な言説や思考について知見を得た。

⑤ 佐藤は、ネパールの貧困層女性、とりわけ賃労働として家事労働に従事する女性たちを対象とする現地調査を実施した。こうした女性たちの生活向上をめざすNGO団体や労働組合の活動に可能な限り密着しながら、その働きかけ対象となっている女性たちへのインタビュー調査及び団体・組織活動への参与観察を行い、彼女たちの労働と生活の実態、その抱える困難、向上に向けた介入の方向と戦略、これに対する彼女たちの反応などに関する情報を収集し、これを分析的に考察するための一定の基盤を構築した。

⑥ 名和は、カトマンズ盆地内で極西部ネパール、ビヤンス地方出身者に対してインタビューを行うとともに制憲議会選挙前の各政党の動き、選管による選挙キャンペーンと

人びとの反応などについて情報を収集した。また、カトマンズ盆地内で制憲議会議員、政治学者などに現状と制憲議会の見通しを聞くとともに関連の英語、ネパール語の資料を収集した。さらに、ピャンス地方出身者のあいだで調査を行い、ローカルな文脈での政党政治、先住民運動、日常の実践のあいだの関係性の変容について知見を得た。

⑦ 谷川は、マオイスト・憲法関係の資料を収集する一方、カトマンズ周辺及び中部タライの政治状況を実地調査した。収集資料を分析した結果、マオイストの革命戦略は人民戦争開始時の「40 項目要求」(1996 年)から統一革命人民評議会「75 項目宣言」(2001 年)に至って理論的にほぼ完成されたことが明らかとなった。その後、マオイストは停戦に応じ和平交渉に入るが、2007 年制定の暫定憲法ではマオイストは実際には大幅な譲歩をしていることが判明した。マオイストが 2008 年 4 月の制憲議会選挙で勝利したものの、それ以後の政権運営に行き詰まってしまった原因も、憲法的にはここにある。また、マオイストが革命運動に動員した地方や民族の諸要求を暫定憲法の中に次つぎと書き込んだため、各地で新たな紛争が勃発・拡大していることが、実地調査で明らかとなった。

⑧ 橘は、マオイスト問題の前後、チェパンの村落社会がどのように外部に開かれていったのか、それとマオイスト問題とのあいだにどのような関わりがあるのか、村落社会で支持政党がどう変化したのかなどについて調査した。バザールへの進出、奨学生の増加と進学率の増加、開拓により、調査地の人びとの生活環境は大きく広がった。このうち、開拓はマオイストの影響により可能になったことが確認できた。しかし、村人の支持政党はマオイスト一辺倒にはならず、それまでの政治的な枠組みが大きく機能していた。マオイスト支持者の多くも、新しい政党に投票してみることにしたという消極的な理由をあげた。選挙においては、民族のパイチャン(アイデンティティ)が強調され、チェパン自治区の統治の原則に関わる文書が制作、配布された。これは、マオイストの民族自治的な連邦制案に呼応したものである。このようにマオイストの出現は、民族意識と権利意識の強化につながったといえる。

⑨ 渡辺は、マオイストが山地社会に与えた影響を調査するため、東ネパールのオカルドゥンガ郡とカトマンズを訪問した。とくに戦争犠牲者問題に注目し、主にその構成や生い立ちを調べた。同郡におけるマオイスト側の戦争犠牲者の構成、犠牲者の氏名、通称、民族・カースト、出身村、学歴、死亡年月日、死亡地、死亡時の年齢、党内での地位などのデータが入手できた。分析の途中ではあるが、共通点として、彼らがマオイストになった背

景には、警察や軍隊から暴行を受けたり、親族を殺害されたりした経験があることが明らかになった。

⑩ 幅崎は、内戦を女性の視点から分析するため未亡人に着目した。内戦により寡婦が増加し、寡婦となった女性たちは自分たちを「単身女性(エッカルマヒラ)」と名乗り始めている。本研究では、寡婦の生活実態及び寡婦グループに入ることによって彼女たちにどのような変化が見られるのかを明らかにするため、寡婦グループ参加者への聞き取り調査及び参与観察を行った。寡婦の行動範囲やネットワークが、夫のいる女性たちよりも広く、親類縁者以外にまで広がっていること、また寡婦であるということがカースト・地縁社会・民族を超えて女性たちを結びつけつつあることが明らかになった。

⑪ 小倉は、マオイストが、10 年間にわたる武装闘争から和平プロセスに転換するプロセスを調査する一環として、制憲議会選挙の際のマオイストの動向を調査した。マオイストの選挙に関する党方針を調査するとともに、紛争中、彼らが本拠地としていたロルパを 3 度訪問し(選挙前に 2 回、選挙直後に 1 回)、ロルパにおけるマオイストの動向、および投票者、他政党の動向を調査した。また、2008 年度には、マオイストの元女性ゲリラの調査のために、ロルパとマオイスト軍駐屯地を訪問した。

⑫ 上杉は、ネパール人のトランスナショナルリズムと紛争後の国民統合との関わりについて研究した。具体的には、グルカ兵を含むネパール人移民の二重市民権獲得運動について調査した。2009 年 3 月にネパールを訪問し、退役グルカ兵の生活戦略について調査するとともに、市民権についての先行研究を検討した。その結果、ネパール人移民団体が二重市民権の獲得に向けて活発に運動を実施していること、当時のマオイスト政権が他の政党よりも積極的にその要求に耳を傾けていることなどが明らかになった。

(4) 国内外における位置づけとインパクト：国内では、現代ネパールの動向を研究するほぼ唯一のプロジェクトであり、日本南アジア学会第 21 回全国大会におけるテーマ別セッション「ネパール制憲議会選挙とその後」において、多くの研究者から質問やコメントが寄せられ、本課題及び研究への関心の高さが伺われた。また、中間的な報告として発表した『民博通信』122 号「特集 マオイスト運動の人類学」も反響が少なくなかった。学会以外での一般向け講演に招聘される機会も多く、報道からでは知りえない時事問題の内面を社会・国民に説明するインパクトがあった。国外では、国立民族学博物館共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」に特別講師ないしオブザーバーとして参

加したネパール人研究者をはじめとして、本研究の認知は高まりつつあり、成果報告に期待が寄せられている。

(5) 今後の展望： 研究の成果を単行本として出版するため、目下準備を進めている。ネパールの政治情勢は、2009年5月4日、マオイスト議長であるダハル首相が、ネパール国軍のトップであるカトワル参謀長を解任したことで連立政権が崩壊し、辞任に追い込まれた。マオイストを中心とした連立政権は9カ月という短命で終わり、マオイストは野党にまわった。こうした政局の混乱で、人民解放軍とネパール国軍の統合・再編、連邦の区分や連邦自治の議論などは進んでおらず、新憲法制定への行程も危惧されている。ネパール情勢は未だ予断を許さなく、今後も継続して調査研究を進める予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計36件)

- ① 安野早己 2009「マオイストになった娘たち—西ネパールの村落社会から見た人民戦争」『山口県立大学大学院論集』10: 20-39 査読有
- ② 谷川昌幸 2009「ネパールにおける平和構築と憲法」『社会科学論叢』(長崎大学教育学部) 71: 17-32 査読無
- ③ Habazaki, M. 2009 “A Study of Single Women’s Empowerment Practice in Nepal,” *The Bulletin of Fuji Women’s University* 46: 165-194 査読無
- ④ Ogura, K. 2009 “After the War, Rolpa Fights Neglect,” *Nepali Time* 439: 10-11 査読無
- ⑤ 南真木人 2008「マオイスト運動の人類学」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 2-4 査読無
- ⑥ 南真木人 2008「リーディング・ガイド」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 16-17 査読無
- ⑦ 南真木人 2008「ネパールの社会運動と留保制度の開始」『人権と部落問題』769: 30-38 査読無
- ⑧ 安野早己 2008「西ネパールの村落社会から見る人民戦争—2001年と2004年の国内避難民流出」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 8-10 査読無
- ⑨ Joshi, N.P. and K.L. Maharjan 2008 “A Study on Rural Poverty Using Inequality Decomposition in Western Hills of Nepal: A Case of Gulmi District,” *Journal of International Development and Cooperation* 14(2):

1-17 査読有

- ⑩ 藤倉達郎 2008「「開発」と「革命」のはざま—カマイヤ農業労働者とマオイスト」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 11-13 査読無
- ⑪ 佐藤斉華 2008『「女は行かなければならない」—婚姻規範への(不)服従、ネパール・ヨルモ女性の語りから』『文化人類学』73(3): 309-331 査読有
- ⑫ 名和克郎 2008「ネパールの海外出稼ぎ者に関するある想像について」(特集「生業と生産の社会的布置からのアプローチ」)『民博通信』123: 12-13 査読無
- ⑬ 谷川昌幸 2008「マオイストと憲法—政治学・憲法学からのアプローチ」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 14-15 査読無
- ⑭ 小倉清子 2008「揺れるネパール」『季刊 民族学』125: 60-65 査読無
- ⑮ 小倉清子 2008「制憲議会選挙におけるマオイストの動向」(特集「マオイスト運動の人類学」)『民博通信』122: 5-7 査読無
- ⑯ 安野早己 2007「ガル・ルトネ (ghar lutne): 家財の略奪—ネパール・マオイストによる地方名望家への襲撃」『山口県立大学大学院論集』8: 21-38 査読有
- ⑰ 佐藤斉華 2007「消え去り行く嫁盗り婚の現在—ヒマラヤ山地民の言説実践における『近代』との交叉をめぐる」『文化人類学』72(1): 95-117 査読有

[学会発表] (計11件)

- ① 渡辺和之「ポスト人民戦争と山地社会の変動—東ネパールにおける海外出稼ぎと都市移住者の増加」(ポスター発表) 日本地理学会 2009年春季学術大会、2009年3月29日、東京都・帝京大学
- ② Fujikura, T. “Of Lands and Red Cards: The Bonded Laborers’ Freedom Movement and the Maoist People’s War in Nepal” Invited Session on ‘Transnational Networks, Globalization and Social Movements’ Sponsored by Society for Cultural Anthropology, American Anthropological Association Annual Meeting、2008年11月19日、Hilton San Francisco, San Francisco, USA
- ③ 小倉清子「制憲議会におけるマオイストの元女性ゲリラ」(分科会「平和構築・民主化・ジェンダー」) 日本国際政治学会 2008年度研究大会、2008年10月24日、茨城県・筑波大学
- ④ 安野早己「西ネパール・ジウムラの帰還した国内避難民についての制憲議会選挙」(テーマ別セッション「ネパール制憲議会選挙とその後」) 日本南アジア学

- 会第 21 回全国大会、2008 年 9 月 27 日、東京都・東洋大学白山キャンパス
- ⑤ マハラジャン ケシャブ ラル「ネパール制憲議会選挙とその後—カトマンズ選挙区 10 区 (マオイスト議長 Prachanda の選挙区) を中心に」(テーマ別セッション「ネパール制憲議会選挙とその後」) 日本南アジア学会第 21 回全国大会、2008 年 9 月 27 日、東京都・東洋大学白山キャンパス
- ⑥ 名和克郎「ネパール制憲議会選挙の諸側面—バンケ郡の事例を中心に」(テーマ別セッション「ネパール制憲議会選挙とその後」) 日本南アジア学会第 21 回全国大会、2008 年 9 月 27 日、東京都・東洋大学白山キャンパス
- ⑦ 谷川昌幸「ネパール制憲議会選挙と新憲法制定への課題—マオイストを中心に」(テーマ別セッション「ネパール制憲議会選挙とその後」) 日本南アジア学会第 21 回全国大会、2008 年 9 月 27 日、東京都・東洋大学白山キャンパス
- ⑧ 南真木人「ネパール—制憲議会選挙による共和制への移行」(南アジアの現状報告①) 第 41 回南アジア研究集会、2008 年 7 月 19 日、岐阜県・長良川温泉
- ⑨ 安野早己「石と弾丸—村人がマオイストに立ち向かった日」日本文化人類学会第 42 回全国大会、2008 年 5 月 31 日、京都府・京都大学

[図書] (計 10 件)

- ① 南真木人 2008 「マガール—仏教への集団改宗をめざす先住民」綾部恒雄監修・金基叔編『南アジア (講座 世界の先住民 3)』344 頁 (262-278 頁) 東京: 明石書店
- ② Ogura, K. 2008 *Seeking State Power: The Communist Party of Nepal (Maoist)* 55 pages, Berlin: Berghof Research Center ([http://www.berghof-center.org/uploads/download/transitions\\_cpnm.pdf](http://www.berghof-center.org/uploads/download/transitions_cpnm.pdf))
- ③ 谷川昌幸 2007 「ネパール憲法」萩野芳夫・畑博行・畑中和夫編『アジア憲法集』(第 2 版) 1152 頁 (531-582 頁) 東京: 明石書店
- ④ 小倉清子 2007 『ネパール王制解体—国王と民衆の確執が生んだマオイスト』(NHK ブックス) 310 頁 東京: 日本放送出版協会

[その他]

国立民族学博物館における本科研費のページは次のとおり。

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19401047.html>

また、成果の口頭発表は、国立民族学博物館の共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」において実施した。詳しくは、<http://www.minpaku.ac.jp/research/jr/06jr090.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

南 真木人 (MINAMI MAKITO)

国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授

研究者番号: 40239314

### (2) 研究分担者

安野 早己 (YASUNO HAYAMI)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号: 40144307

マハラジャン ケシャブ ラル (MAHARJAN KESHAV LALL)

広島大学大学院・国際協力研究科・教授

研究者番号: 60229599

藤倉 達郎 (FUJIKURA TATSURO)

京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号: 80419449

佐藤 斉華 (SATO SEIKA)

帝京大学・文学部・講師

研究者番号: 10349300

名和 克郎 (NAWA KATSUO)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号: 30323637

谷川 昌幸 (TANIGAWA MASAYUKI)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号: 10271214

### (3) 連携研究者

橘 健一 (TACHIBANA KENICHI)

立命館大学・産業社会学部・非常勤講師

研究者番号: 30401425

渡辺 和之 (WATANABE KAZUYUKI)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号: 40469185

幅崎 麻紀子 (HABAZAKI MAKIKO)

北翔大学・人間福祉学部・非常勤講師

研究者番号: 00401430

### (4) 研究協力者

小倉 清子 (OGURA KIYOKO)

ジャーナリスト、トリブバン大学人間学部大学院修士課程・大学院生

研究者番号: なし

上杉 妙子 (UESUGI TAEKO)

専修大学・文学部・講師

研究者番号: 90260116